

# ヨタカ 英: Jungle Nightjar 学: *Caprimulgus indicus*

## 1. 分類と形態

分類: ヨタカ目 ヨタカ科

全長: 29 cm      自然翼長: 200-225 mm  
尾長: 117-146 mm      嘴峰長: 7.5-13.0 mm  
ふしよ長: 15-18 mm      体重: 73-113 g

計測値は清棲(1952)より。全長のみ榎本(1941)。

### 羽色:

灰白色や茶褐色などが虫食い状に混じった複雑な枯葉模様をしている。喉の左右、初列風切の外側4枚、尾羽外側4枚の先端近くに白斑がある。雌では尾羽の白斑はなく、喉や初列風切の白斑は小さく不明瞭。



図1 ヨタカ(photo by 内田博)

### 鳴き声:

雌雄ともに鳴くが、性別特有の鳴き声があるかどうかは不明。鳴き声は主に4種類に分けられ、雄のフライトディスプレイ中には4種の声を組み合わせて鳴く。

(1)連続音:「キョキョキョ…」や「キョッキョッキョ…」は最も一般的な鳴き声で、なわばり主張に使われる。「ポウポウポウ…」や「コウコウコウ…」は周辺に他個体がいる時に使われる傾向がある。

(2)単音:「クワッ」や「コア」は同種間での排他時や警戒時に使われ、飛びながら鳴くことが多い。「ゲッ」「グワッ」「ギャッ」「ガッ」は稀な鳴き声で、同種間の排他時や天敵への偽傷行動時など興奮度の強い状態で使われる傾向がある。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

ヨタカは基亜種 *C. i. indicus* の他に *C. i. hazarae*, *C. i. kelaarti*, *C. i. jotaka*, *C. i. phalaena* の5亜種に分類されている(Cleere 1998)。日本で観察される亜種 *C. i. jotaka* は中国東部や朝鮮半島、ロシアのウスリー地方、日本などで繁殖し、冬期にはインドシナ半島やマレーシア半島などへ渡る。国内では九州から北海道にかけて繁殖し、島しょ部では旅鳥として観察される。

### 生息環境:

自然林、二次林、植林地などの森林環境を中心に、農地、草地、河川敷、湖沼、市街地でも観察される。特に明るい森林環境を好み、下層植生の乏しい若齢植林地や、マツ混交林、ブナ・ミズナラ林などの落葉広葉樹林を好む。栃木県では標高300m以上に多く生息しており、中央アルプスでは標高1500mでの観察例もある(清棲 1952, 平野ほか 2012)。かつては平野部の里山や草地にも多く生息していたようだが、里山の管理放棄や森林開発などによって生息状況が悪化し、現在は環境省のレッドリストで準絶滅危惧になっている(環境省 2014)。

## 3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

非繁殖期

繁殖期

渡り

### 繁殖システム:

なわばりの範囲は直径200-400mほどで、隣接個体との境界部分で一部なわばりが重なり合う場合もあるが、基本的に各なわばりは独立して存在している(野中2013, 多田2016)。オスは求愛期に翼をV字状に広げながらフライトディスプレイを行なう(Cleere 1998)。フライトディスプレイは滑空、羽ばたき、ホバリングを組み合わせた飛行である。

### 巣:

巣材を使わず直接地上に産卵・抱卵するが、巣の中央部はわずかにくぼんでいる(藤巻1973)。



図2. 抱卵環境と卵(マツ混交林の例)

### 卵:

一腹卵数は通常2卵だが、1卵の事例もある。卵は長径28.5-37mm, 短径約19.5-23.6mm, 重さは8.2-9.5g(清棲 1952)。卵は灰白色の地に灰褐色や灰色の大きな斑がある。



図3. 抱卵中のヨタカ(雌)

### 抱卵, 育雛期間:

抱卵は主に雌が行ない(内田 2011)、抱卵期間は約19日(清棲 1952)。ヒナは孵化後数日で産卵場所から数mほど離れた場所に移動する(藤巻 1973, 才木ほか 2014)。育雛期間は不明だが、15日齢頃には飛べるようになっており、17日齢以降は巣の周辺から姿を消している(藤巻 1973, 才木ほか 2014)。

### 渡り:

4-5月頃に渡来し、9-10月頃に渡去する。遅いものでは11-12月まで観察される。

## 4. 食性と採食行動

採食と給餌は夜間に行なう。音を立てずにひらひらと飛びながら、大きな口で吸いこむようにして虫を捕える。また、林道などに降りて地上にいる虫を食べることもある。ガ、コガネムシ、ガガンボ、トビケラ、ヒメバチ、カメムシ、カゲロウ、カマキリ、バッタなどを食べる(清棲 1952)。

## 5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

### ● 巣を作らないヨタカの「巣」へのこだわり

ヨタカは巣材を使わず地上に直接産卵するため、ともすると営巣環境にこだわらないように思える。しかし、先行研究と筆者の営巣地調査の経験から、営巣環境には次のような共通点が見られる。

(1)巣の直近に草が生えていない:ヨタカの典型的な営巣

条件であり、下草が密に生える林床や草地には営巣しない。

(2)抱卵場所は水捌けのよい環境：産座は腐葉土、マツの葉、小枝、小石が薄く堆積した場所であり(藤巻 1973, 柿澤・小海途 1999, 多田ほか 2015, 内田 2011), 雨後に水が溜まるような場所には営巣しない。

(3)巣の上空は樹冠などで覆われていない：上空から巣へのアプローチが困難な林内には営巣していない。

(4)巣の近くに藪や林がある：人が巣に近づいた際には、ヨタカの親や飛翔可能な幼鳥はそこに逃げ込む。

そのため、こうした条件が生じやすい山頂部や稜線付近に営巣することが多く(藤巻 1973, 多田ほか 2015), 伐採跡地の林縁部や崩落によって林冠がパッチ状に空いた場所、積雪地の落葉広葉樹林での営巣が多いのだと考えられる。

このように巣を作らないヨタカにも営巣場所へのこだわりがあり、里地の管理放棄などによってこのような営巣適地が減少したことが、近年のヨタカの減少の一因になっているのだろう。



図4. ヨタカ営巣地の例。(a)若齢植林地 (b)マツ混交林 (c)小規模崩落地

### ● ヨタカ本来の生息環境とは？ -岡山の事例-

ヨタカの生息適地として植林地を思い浮かべる人は多いだろう。岡山県でヨタカが確認された場所を植林地と自然林(二次林も含む)に分けて解析したところ、植林地が54%、植林地と自然林の混在林が17%、自然林が29%だった(図5)。このことから、現在では植林地がヨタカの生息適地になっていることは間違いないが、人為的な植林地がヨタカ本来の生息環境とは考えにくい。そこで、岡山県の植林地と自然林の個体数密度を比較すると、植林地では4羽前後、自然林では4-5羽前後が観察され、両環境に明確な差は見られなかった(図6)。つまり、ヨタカは植林地が好きなのではなく、営巣に適した下草の少ない環境を求めた結果、現在では生息地に占める植林地の割合が高くなっていると考えられる。

岡山県の自然林における

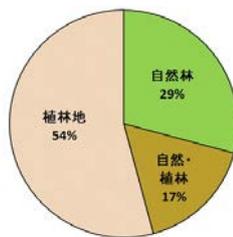


図5. ヨタカの生息が確認された環境。自然林は主にミズナラやマツなどの植生(含二次林)。植林地は主にヒノキ植生。

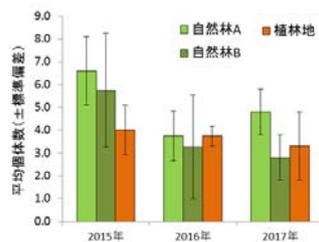


図6. 定点2か所から半径500m以内でさえぎったヨタカの平均個体数。自然林はマツ混交林、植林地はヒノキ植林地。

ヨタカの生息環境として、積雪地の落葉広葉樹林や稜線付近の乾燥地が挙げられる。このような環境には、下草の少ない場所がパッチ状に存在していることも多く、ヨタカ本来の生息環境と考えられる。また、栃木県では河川敷の疎林で多くのヨタカが観察されており(野中 2013), 岡山県では稜線付近の小規模な崩落地が生息適地になっていることから、自然攪乱によって裸地ができやすい環境もヨタカ本来の生息環境と考えられる。岡山県の多くの地域は常緑照葉樹林が極相林であることから、手つかずの自然林でのヨタカの生息適地は限られる。しかし、有史以前からの人による里地の利用・管理によって営巣適地が増えたことで、本来の分布以上に生息域を拡大し、雑木林や植林地へ適応していったと考えられる。しかし、現在は植林地が生長し、生息環境として適さなくなったことや、里山の荒廃によって、再び生息地が狭まりつつあるのだろう。

### 6. 引用文献

Cleere, N. 1998. Nightjars: A Guide of the Nightjars, Night-hawks and their Relatives. Yale University Press, New Haven, Conn.

榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧. 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.

藤巻裕蔵. 1973. ヨタカの営巣2例. 鳥 22: 30-32.

平野敏明・野中純・石濱徹・長野大輔・手塚功・石川ふく・川田裕美. 2012. 栃木県におけるヨタカの生息状況. Accipiter 18: A1-A7.

柿澤亮三・小海途銀次郎. 1999. 日本の野鳥 卵と巣図鑑. 世界文化社, 東京.

環境省. 2014. レッドデータブック2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—2鳥類. ぎょうせい, 東京..

清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑Ⅱ. 講談社, 東京.

野中純. 2013. ヨタカの基礎的生態とモニタリング調査. バードリサーチ調査研究支援プロジェクト支援先調査研究プラン成果報告2012年度: 1-6.

才木道雄・原口竜成・木村恒太・守口海・高野充広. 2014. ヨタカにおける抱雛行動と孵化後のヒナの移動. 山階鳥学誌 45: 98-101.

多田英行・大川洋子・香西宏明. 2015. アカマツ林でのヨタカの営巣2例. しぜんしくらしき (95): 5-6.

多田英行. 2016. マツ混交林におけるヨタカの生息密度となわばりの分布. 日本鳥学会大会講演要旨集:125.

多田英行. 2017. 岡山県におけるヨタカの生息状況～植林地とマツ混交林の重要性～. しぜんしくらしき (103): 4-5.

内田博. 2011. ヨタカの抱卵行動. 日本鳥学会誌 60: 238-240.

### 執筆者

多田英行 チュウヒ保護ネットワーク



昼は海辺でチュウヒ、夜は山中でヨタカという、両極端な観察を続けています。ヨタカの調査では聴覚と勘に頼った時代錯誤な調査をしていますが、これはこれでヨタカの気持ちに最も近づく調査方法なのではないかと思う瞬間があります。